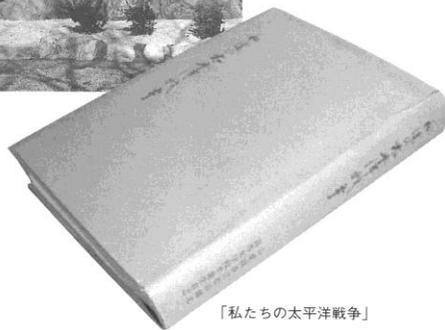


私達の太平洋戦争

恒久の平和を願う無名作家たちの証言

Saki Kikuchi

菊池 佐紀

護国神社境内にある
殉職女子学徒追憶之碑

「私たちの太平洋戦争」

ここに一冊の本がある。昭和五十六年五月に、県立松山城北高女（現北高）同窓会から刊行された五四七頁に及ぶ部厚いこの本は、ワインレッドの洒落たカバーも今は少々色褪せて見えるものの、あの太平洋戦争を語り継ぐ語りべたちのかけがえのない証言集なのである。

第一期生から第二十三期生までの卒業生有志一六一名による個々の戦争体験を虚構を混じえず、シビアに書き綴ったもので、「私達の太平洋戦争」と名付けられた。

その第一部は、生か死かのぎりぎりの状況に立たされた女性たちの辛い戦時体験を描く。原爆に出遭った人、満州から子供を連れて必死で引き揚げてきた人、夫に戦死された人など、その辛苦は様々だが、彼女たちの願いはすべて、戦争拒否、不戦への強い意志、恒久平和への祈願で貫かれている。

特筆すべきは、その第二部「追悼篇・静かにねむって下さい」の五十三篇の手記だ。これは、今治倉紡工場に勤労働員中、爆死した二十二名の同期生を追憶し哀悼の気持ちを表した同期生五十三人の魂の叫びと言える。終戦

直前、県下で実際に起った殉職女子学徒たちの悲劇の実態とその前後を確実に描写した貴重な証言である。

文章の商品化現象は年々激しくなり、文学賞をとり華々しくデビューする作家の文章は「文学作品」として世にもはややされても、こういった市井の庶民たち、つまり「無名作家たち」の作品はとかく片隅に押しやられ勝ちだ。が、その文章の巧拙は別として、小説形式をとらず、一切の虚構を排除

して、事実の上に立って真実の姿を披瀝した彼女たちの文章には衝撃的迫力があり、十分に「記録文学」としての価値があると思える。現在この書が埋もれたままで余り世に知られていないのを残念に思う。

松山城北高女二年生百八十名が学業を放棄して倉紡工場に徴用になったのは昭和二十年春まだ浅い季節のことであった。工場側は当時十四歳の少女たちに過酷な重労働のノルマを課して

いる。

女生徒たちは満足な食事も与えられず、ノミ、シラミの繁殖した劣悪な環境になやまされながら、懸命に十三耗の機銃弾頭の生産に励む。そして、半年後の八月五日、悲劇が襲いかかる。その夜、今治市は空襲に遭って壊滅、近見県道を走って逃げる女生徒たちの頭上に敵機は容赦なく機銃掃射を浴びせて殺りくした。全国でも例を見ないという二十二名の学徒大量犠牲者を出すことになったのは、愛媛県の名誉にとっても大きなマイナスイメージとなった。

炎暑のさ中、遺体を家へ運ぶことが不可能なため、翌六日に、求島海峡に面した動仙鼻海岸で、十四歳以上生きることとを神から拒まれた少女たちは、すべて茶毘に附された。きめ細かな砂丘が一面に続くこの風光明媚の海岸一帯は異臭が充満して、酸鼻をさわめた。海岸のすぐ向い側に円蔵寺と呼ぶ寺があり、当時の住職、故乗松即泉和尚は学徒たちを哀れんで、海辺に残った遺骨、灰等を集めて寺の境内に埋め、その後、碑も建てられて供養がほどこされ現在に至っている。円蔵寺は昭和五十七年に火災に遭ったが碑は事なきを得てそのまま残った。

昭和二十六年十一月、松山市御幸寺



今治円蔵寺境内にある碑



殉職女子学徒を茶毘に附した動仙鼻海岸

山麓にある護国神社の境内に、「殉職女子学徒追憶之碑」が有志の浄財により建立された。「再びわが国土を戦火で包んでほならぬ」という同窓生たちの切なる願いが実ったのである。植村淑子の序文の一部に、「私たちは日本の歴史が大きく変化する節目の激動の時を生き抜いた。種々の体験は忘却の彼方に埋没するには余りにも重

く深く、祖国のために生命を捧げた人達の千万無量の想いは忘れ去るには余りにも熱く切なく」とある。現在の平和はこれらの犠牲者が血を流して築き上げたものだ、と言ったら、ある若者に一笑されたことがある。現



故 乗松即泉和尚

在、日本人の意識構造は大きく変化した。日本は平和に狎れ、飽食に狎れ、殺人が日常茶飯事となる人命軽視の無法地帯に変わりつつある。タレントの書いた離婚話がベストセラーとなる時

代、真の文学はどこへ行ってしまったのか。歴史は再び盲目的に愚かな戦争を繰り返している。人間の英知が「戦争悪」を乗り越えることができないうは悲しい。

すぐれた戦記文学として頂点を極める大岡昇平の小説「野火」の敗残兵、田村一等兵がどうにかして生き抜こうとしたように、「私達の太平洋戦争」の著者たちも戦時下の極限状況を耐えて、立派に生き抜いてきた。戦争体験者はとりわけ「生」への執着が強く、生きることへの渴望がきわ立っていると言われる。「いのち」への愛おしみがおのずからそうさせるのだろう。今、静かな老境を迎えている著者たちの恒久平和への悲願が達成されるべく、八月五日の夜、生死の境を彷徨した同時体験者として共に祈ってやまない。

きくち、さき 文芸誌「アミーゴ」編集発行人。興生涯学習推進講師。漱石文学の再読、再認識作業に熱中。改めて漱石の魅力にとりつかれる。平成十三年十一月、新居浜生涯学習大学の依頼で講師をつとめる。「漱石文学は読み継がれるか」同じく十二月、松山一週会で「漱石の孤独」を講話。代表作に「編組の家」（第十四回織田作之助賞佳作「血みどろ絵巻考」など。北菜市在住。